

## 静かな農業革命

歴史的に農業を行ってきたカリンポンにある、ドクター・グラハムズ・ホームズで進行中の革新的な「地域園芸振興プロジェクト」によって、住民が農業に回帰する動きが活発になっています。この動向の鍵は、暮らしを支えることが難しくなっている農業を、利益を生み出す形態に組み変えることにあります。

アッパー・サマルボングに住む 35 歳の農民、スシュマ・シエルパさんは、期待に満ちた様子でカリンポンのドクター・グラハムズ・ホームズで行われる長期農業・園芸研修の初回の授業に出席していました。代々、農業を唯一の収入源としてきた一家の彼女は、この研修に高いモチベーションを持って臨んでいます。「農地の生産性を向上させるための新しい技術が学べると聞いて、この研修に参加しています。」



ローカリゼーションに関する映画を見るプロジェクトの研修生/写真： Satish Nagaraji, OWSA

スシュマさんは、収穫、品質、市場アクセスの改善を促進する、先進的な農業訓練プログラムの 18 名の参加者のうちの一人です。

この研修プログラムは、カリンポンのドクター・グラハムズ・ホームズが行う、「地域園芸振興プロジェクト」の一環です。このプロジェクトは、JICA の支援を受けて、日本の NGO である宮崎国際ボランティアセンター(MIVC) と共同で実施されています。

### カリンポンの農業

西ベンガル州の小ヒマラヤの避暑地であるカリンポンは、デオロとドウルビンという 2 つの山の尾根に位置し、テーツァ川を見下ろしています。この地域には多種多様な動植物が生息しており、温暖な気候は農業・園芸に適しています。カリンポンの 80% の人々が生計を農業に依存しており、1 年間の平均的な農業収入は 1 万ルピーです。

カリンポンでは農業が主要産業であるにも関わらず、その規模は大きくありません。ほとんどの農民は、自家消費するだけの農作物を生産しています。商品作物を生産している農民は地元の市場に産物を持ち込みますが、最近ではマーケットには近隣のシリグリやシッキム州からの産物が溢れています。農民には年間を通して商品を生産・加工するノウハウがないため、市場に流通するものはその季節のものに限られています。

## ドクター・グラハムズ・ホームズ：より良い暮らしへ向けて



土壌づくりを学ぶ研修生/写真：  
地域園芸振興プロジェクト

ドクター・グラハムズ・ホームズは、1900年に宣教師のジョン・グラハム、キャサリン・グラハム夫妻によって創設された教育機関で、高い評価を受けている学校です。当初は、恵まれない子どもたちに住む場所や教育、職業訓練を提供することを目的に始められましたが、それらは日本のMIVCのような、各国の団体からの支援によって成り立っています。

ドクター・グラハムズ・ホームズは経済的支援を必要とする生徒だけでなく、授業料の支払いが可能な家庭の子どもも受け入れています。また、寄宿生も地元の生徒もおり、民族や宗教に関係なくすべての子どもに対して門戸を開いてきました。恵まれない子どもや貧しい地域の生計改善へ貢献するという方針の下、ドクター・グラハムズ・ホームズは農業やコンピューターといった科目も職業訓練に盛り込んでいます。園芸技術センターは、2005年から2008年にJICAの支援で実施された「グリーンハウス・コミュニティサービス」事業によって設置されました。

サントック村、パイヨン村、ドゥングラ村、ブドゥング村、モンチュ村の5村から選ばれたリーダーは、体系的な農法の導入に意欲を示し、収入を増やすための新しい作物や花をそれぞれの田畑において試験的に栽培し始めています。

### 付加価値を高める作物の多様性

サントック村の村長のL.B.ライさんはプロジェクトによって恩恵を受けました。彼はサントック村では初めて日本米の実験を行い、現在4期目の日本米を栽培中です。ライさんは時間をかけた着実なアプローチによって利益を上げましたが、そのことがサントック村の村人を活気付けました。

1期目は、ライさんは100グラムの日本米の種籾から始めました。収穫高に自信を持ったライさんは次の年は種籾を400グラムに増やし、100キログラムの収穫がありました。3年目には500グラムを栽培して143キログラムの収穫となりました。彼は、日本米は1キロあたり80ルピーで販売できると教えてくれました。センターによって奨励された産物の生産によって50%もの収入向上が可能と理解した他の農民たちは、次第に日本米の生産に一步を踏み出し始めました。

安定した生活や地域の経済安定のためには、技術センターの強化と増えつつある研修の要望に応えることは必然でした。事業の第2フェーズとして「地域園芸振興プロジェクト」として名付けられた事業は、これらの需要に応えるために開始されました。

### 持続的に雇用を生み出すために

「地域園芸振興プロジェクト」は、革新的で持続的な有機農業を通じて、農民の生計を支える選択肢を増やすことを目的としています。研修センターには、組織培養実験室や現代的農業設備、地元にある竹とビニールシートを使って作られた低コストの温室が備えられています。

センターでは1年間の長期研修の他に、1ヶ月の短期研修と6ヶ月の中期研修が実施されています。この1年間のうちに、プロジェクトによって長期11名、中期16名、短期89名が研修を受講しました。この研修は農民だけではなく、教師や学生、退役軍人といった人たちまでもが興味を示しています。

強い責任感を持ち、よく教育されたインド・日本の事業スタッフと、Uttar Banga Krishi Vishwa Vidyalaya (UBKV), Krishi Vigyan Kendra (KVK)、農業・園芸局といった機関からの客員専門家によって、研修プログラムでは、土壌づくり、発芽、病気・害虫対策、組織培養、食品加工、低コスト温室の組み立てといった一連の園芸・農業の知識を提供しています。施設のレベルを上げることが、理論と現場見学を含む実践に基づいた議論の促進に繋がるのです。

### 土壌づくりと温室

実験を経た有機農法を導入することで著しい生産性の向上が見込まれますが、カリンボンではすでにそれが証明されています。1年の長期研修を修了した東パイヨンバスティ村のドルマ・シェルパさんは、土壌づくりと発芽の過程において並外れた生産性の向上が見られました。

ドルマさんは、「通常、種の60%-70%が発芽していましたが、研修で学んだ土壌作りと発芽の手順に従うことにより、95%という確率でほぼ全ての種が発芽しました。去年は食事で使うための唐辛子を市場で購入していましたが、今年は状況が一転しました。自家消費する量を除いても、市場で売るための産物が十分に確保できたのです。自分たちで育てたものを食べるのは気持ちがいいです。」と話す。

「私の畑の様子を見て、村の人たちは私の農法を取り入れたいと思ったようです。」と話す彼女は誇らし気です。

サントック村のマヌ・ライさんにとって役立ったのは、土壌作りと発芽についての知識だけではありません。この7年間、マヌさんはとうもろこし、粟、米、野菜を栽培してきました。短期研修によって、彼は作物の栽培方法を変えただけでなく、種類を増やすことにしました。今年、彼は日本米に挑戦しましたが、良く育った稲の収穫を楽しみにしています。

彼は今では時期外れの作物を栽培することで以前より多くの稼ぎを得ていますが、これは全て低コストの温室のおかげです。「研修では地元で取れる竹とビニールシートを使った低コストの温室作りを学びました。温室では雨季や時期外れの野菜でも育てることができます。そういった野菜は高値で売れるため、手をかけずに多くの利益を得ることができるのです。」

### 仲介業者を通さずに適正な利益を確保する

「地域園芸振興プロジェクトの」研修生は、事業による別の利点にも気付き始めました。研修センターは、皆が集まってより良い将来について考える場になっています。彼らは、生産者の産物が適正なマーケットにおいて、適正な価格で販売されることを目指した、生産者コーポラティブ組織を結成しました。「ここでは、仲介業者が利益の大部分を自分の取り分としてきましたが、それらは理論的には私たちの利益であるはずです。」と、生産者組織の代表、ジテンド・ロンゴンさん(64歳)は話します。

体験ショップで販売される新鮮な野菜 / 写真： Satish Nagaraji, OWSA



“Trainees Realistic Shop”(体験ショップ)と命名された店舗が事業地に開店し、コーポラティブのメンバーたちはそこで各自の農産物を販売することができます。地元の人たちは喜んで産地直売の生産物を購入し、「有機栽培のものは味がおいしい。」と言います。

研修は、農民のこれまでの農法を変えただけではなく、プロジェクトが対象とする村（現在では28村）のコミュニティに長期的な変化をもたらします。体系的な有機法で高収量を実現することはゴールではなく、まだ始まりの段階です。今では研修生が集って農業の繁栄のための新しいアイデアを話し合う場が確保されました。そこでは生産者が団結するという意識が生まれ、将来への希望を皆が共有しています。